

おい書館 No.15

図書館新発見

朝霞図書館

「ステキな図書館だったね」
 「また、行ってみたい！」
 八月二十三日、猛暑の中、十
 一名で訪れた朝霞図書館は、そ
 んな図書館でした。
 東武東上線の朝霞駅から、歩
 いて十分くらい先の所の、緑に囲
 まれた静かな場所にありました。
 隣には中央公民館、コミュニティ
 センター。前には大きな体育館
 があり、三、五〇〇坪の土地に建
 てられたコゲ茶の平屋建てとし
 た。(一部二階、一部地下)

中へ入ると、パツと視野が
 開けたような明るく爽やかな空気に眩
 しさを感じました。低い書架と
 館内が一望でき、中央付近がト
 ップライトになり、中庭があり、
 自然採光が生
 かされている
 からだと思ひ
 ます。

テレビを見てい
 る人、リラクスし
 てソファで読書してい
 る人、個室風の予約席で机いっ
 ぱいに本を広げて勉強している
 人、くつろぎコーナーでは長眠りし
 ている人もいました。



配架に工夫されており、利用
 の多いものはジャンルごとを集め
 てありました。ティンズコーナーや、
 マンガ、旅のパンフレットのコーナ
 ーまであり、並べ方も思わぬ手に
 取って見たくなるように工夫さ

れていて、心憎いばかりの配慮
 に感嘆の声を上げながら見学さ
 せて頂きました。お茶のサービス、
 開館時間の延長、司書の教など
 羨ましい事ばかりでした。

大澤正雄図書館長がまた、す
 ばらしい人で、二時間の約束を
 三時間近くかけて説明、案内し
 てくださいました。図書館と
 は何かを深く考えさせられた事
 でした。「図書館とは、コミュニ
 ティのサロンであり、地域にど
 う貢献するかです。」とは氏の
 言葉ですが、経済性、効率性ば
 かりが優先する今日、「ムダがあ
 ってもいい、いい一言が
 耳に残っています。
 (文責 浅山)



図書館というところか暗く、張りつめた静寂を思われる方も多いたろうが、ここ朝霞市立図書館は、小さな話し声や物の触れ合う音などが、ざわざわとさざざ液のように漂い、時には子ども甲高い声も聞える。大きなガラス窓には陽光が注ぎ、自由に開閉出来る天窓からは自然の光や風が入り込む。緊張感とはなくり、クススード「

図書館は貸本屋ではない」を 実践する朝霞図書館

子どもコーナーでは、絵本の多くが子ども目の高さの書架に、背ではなく表紙が見えるように並べられている。ニークなのはヤングアダルトコーナーだ。壁のボードは主に中高生用に開放されていて、彼らの描いた作品でいっぱい。中央には大テーブル、書架には暖風、雑誌、彼らの作品のファイルが並

ぶ、図書館報の表紙絵も彼らの絵だ。ここは確実に彼らの出合いの場であり、ほつと息つく空間なのだ。本を読まなくても来るだけでいいのですよ。と館長さん。選書にもレイアウトにも館の主張が滲み出ている。

貸出しカウンターで、利用者と言葉を交しながら働いている職員は、全員司書であるとのこと。

館長さんは、貸出しは図書館のいのちですから、とことまげに言われるが、私はこの言葉にこの図書館の基本理念を見た思いで深い感動を覚えた。利用者市民がいかに満足するかということに最大の重点を置けば、その接点となる貸出し業務に、適

切なレゾレンスをし得る経験豊かなプロを配置するのは当然のことなのだ。職員の採用は教育委員会があたり、バイトに来た図書館専攻の学生からが多いという。パートもプライバシーの尊重のため、近隣からは採らないという配慮もなされていた。

市民団体の図書館設立運動に端を惹き、行政と一体となって



研究を重ね、周倒な準備をして開館されただけあって、運動の

理念の高さが随所にあらわれていた。市民のサロンとして、文化を享受し、発信する場として理想的に機能していることは羨しい限りであった。(文責 鈴木)

発行 「おい図書館」

連絡先 青木和子

〇四七三(六七)五三八四